

近代日本における「宗教」概念の受容と仏教への思想的影響

発表者：脇 崇晴 (九州大学)

キーワード：近代日本、宗教、仏教

本発表では、近代日本の仏教者によって「宗教」がどのように理解され、その宗教理解がその思想家の仏教思想にどのような影響を与えたのかについて考察することを主題とする。普遍的な「宗教」という概念は、近代ヨーロッパで形成され、日本には明治期になって新たに移入されたものである。近代日本における宗教概念の受容については、「信仰 (belief)」中心の宗教概念への注目など、多くの先行研究の蓄積がある。その一方で、「仏教の近代化」が、清沢満之 (1863~1903) を代表とする明治期の仏教者の思想研究を通して盛んに論じられてきた。そこでは近代的な価値観 (「合理性」や「個」の重視など) を踏まえつつ、いかにして「信の確立」が成立し得たのかが問題となっていた。

しかしながら、近代日本において「宗教」と「仏教」を結びつけて考察した研究は、先行研究にはほとんど見られず、最近になってようやく始まったばかりとあってよい。¹

具体的には明治の初期から中期にかけて活躍した浄土真宗 (本願寺派) の僧侶・島地黙雷 (1838~1911) の思想を主に取り上げる。彼が、近代において仏教者として本格的にヨーロッパの「宗教」に学んだ先駆的な人物であることは間違いないだろう。論の足掛かりとして、彼の有名な「三条教則批判建白書」の中で、“religion” に言及された文章を取り上げたい。

凡ソ民ノ^(イ義)蚩々タル、何ノ世ノ時カ無カラサラン。其心ヲ制シ、其ノ情ヲ慰スル、宗旨ニ依ラスンハ何ニカ依ラン。是以欧米各国未ター一人ノ無宗旨ナル者アルヲ聞カス。欧諺無頼ノ者ヲ斥シテ、「オーム、サン、ルリジ^人ヨ^無ン」ト云、無宗旨ノ人ト云フ意也。²

ここで宗教 (「宗旨」) がまずもって民の心を制御し、その情を慰めるものと捉えられる。「宗旨」が “religion” の訳語であることは、「人無宗旨」の原語としてフランス語の “homme sans religion” が示されることから明らかである。それは、ヨーロッパで「無頼の者」、つまり礼儀を知らない人たちを非難する言葉として使われているとされる。ここに、人々の心を教え導き、荒れずさんでしまった人の情には慰撫を与えるとする、宗教 (religion) に対する島地の基本的な理解の姿勢が見て取られる。

上述の宗教理解に定位して、島地黙雷の宗教理解と仏教思想の関係を論じていく。そのために、(一) 近代日本における宗教や仏教をめぐる先行研究を整理した上で、(二) 「教」としての宗教 (「宗旨」) の詳細を述べ、(三) それと彼の仏教思想との関係を明らかにする。

¹ 先鞭となる近年の研究としては、オリオン・クラウタウ『近代日本思想としての仏教史学』、法蔵館、2012年、Kämer, Hans M. *Shimaji Mokurai and the Reconception and the Secular in Modern Japan*, Hawaii, University of Hawai'i Press, 2015 が挙げられる。

² 二葉憲香、福嶋寛隆・編 『島地黙雷全集』第一巻、本願寺出版協会、1973年、22頁。